（公社）兵庫県建築士会　姫路支部会報

姫路支部だより
HIMEJISHIBUDAYORI

10
2016 October No. 17

1　9月の活動報告　10月の活動予定　お知らせ
2　事業報告　環境デザイン研修会　山田　克幸
3　姫路建築探訪
　姫路文学館　関戸　佐智代
　望景亭（旧濱本家住宅）　福岡 憲昭・山本 薫
5　トピックス　第9回
　変遷していくかたちと受け継がれていく文化　三木　健義

表紙写真　リニューアルオープンした姫路文学館
（姫路建築探訪より）

9月の活動報告

9.14（水）模型体験講座（ものづくり体験館）

9.17（土）ＣＰＤ認定研修会
第15回建築家講演会（ものづくり大学校）

9.21（水）第17回環境デザイン研修会（姫路建設会館）

9.23（金）ＣＰＤ認定講習会
第6回構造学習会（姫路建設会館）

9.29（木）ＣＰＤ認定事業
第6回建築相談（姫路市役所）

9.30（金）模型体験講座（ものづくり体験館）

10月の活動予定

10.　6（木）模型体験講座（ものづくり体験館）

10.19（水）第18回環境デザイン研修会（姫路建設会館）

10.20（木）ＣＰＤ認定講習会
第7回構造学習会（姫路建設会館）

10.22（土）～23（日）第59回　建築士会全国大会　大分大会
ＣＰＤ認定　研修見学会

10.27（木）ＣＰＤ認定事業
第7回建築相談（姫路市役所）

■第15回建築家講演会報告

15回目を迎えた本年度の建築家講演会は青木淳氏に来ていただきました。当日は、地元はもちろんのこと京都や大阪からはるばる来られて熱心にメモを取りながら聞かれている若い方から造園家の方まで幅広い層の方が来られていました。

講演会後は、講師控室で姫路支部スタッフの方と青木さんを囲み、会員の様々な質問に丁寧に答えられて貴重な時間を過ごすことができました。

お知らせ

11月の模型体験講座は、8　10　21日　です。

事業報告　環境デザイン研修会

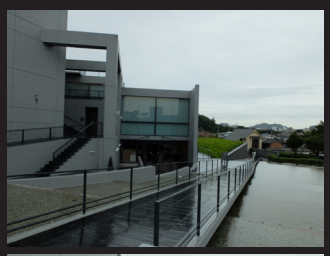
日時：平成 28 年 9 月 21 日　20 時～ 22 時 30 分
場所：姫路建設会館
出席者（敬称略）：大北氏（講師）、山田氏、土川氏、加藤氏、松岡氏、上川氏、黒木氏、丹羽氏、廣瀬氏、中村氏、景山氏【計 11 名】

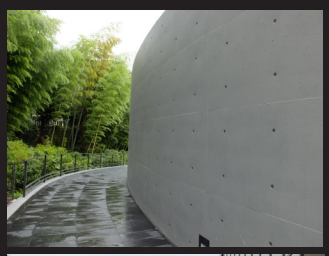
◆概要
・株式会社　大北美松園　大北望氏を囲んでの座談会
　自身の作品紹介を通じて、庭への考え方、仕事観などのお話があった。

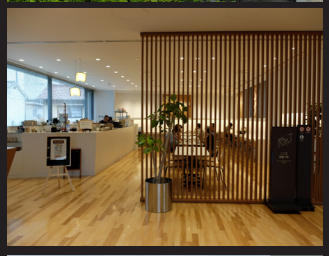
◆講義の内容
・建築と庭がマッチすると建築が良くなるので、本来はこれらの設計を同時並行ですべき。
・庭は非生産性なものなので、庭にコストをかけることへ施主の理解が得られにくい。
・学問と文化は異なる（歴史的な建物の庭の計画で、学術的には当時の時代の庭を再現すべきという意見があったが、庭は発掘されなかったので作り手としては現代のものでいいのでは）
・一切の手抜き、妥協をせずに取り組んだ仕事を見てまた依頼が来るという循環になっている。
・「骨格のしっかりとした庭を造る」
・山の木を庭に使うなら、生えていた向きや土壌を考慮すべき。
　（山土は一般的に痩せ土だが、庭は肥沃土なので山木が一気に成長し、枝ぶりや形が変わる）
・１００年、２００年と残される庭を目指す。最初の見た目がよければいいというのは違う。
・なぜそれが作られたのかといった、そのものの意味を考え、本質をつかむことが大切（例：手水鉢の意味。街中に茶室をつくると水がないので、井戸からくみ上げてきた水をためておいて手を清めるためにつくられた）。
・「こうあるべき」をいかに外していって概念から自由になるか。概念だけでいくと思考が硬くなってしまう。
・デザインには、ひらめきと理詰めがある。
・日本と海外では気候風土が違うので、海外の庭で使われているものをそのまま日本に持ち込むと無理がある（例：噴水の意味。欧州は硬水で水不足のため、山から引いてきた水を空気に触れさせることで飲める水にする必要があり、噴水が生まれた。戦争などの非常時には、これが飲み水になる）。
・日本の庭は座観式。
・落葉樹を幹が見えるように建物のそばに植えると、夏は木陰ができ、冬は日光を通す。遠近法から見ても狭い庭を広く見せられる。酸素も自給自足できる。
・庭は自然の再現だけではない。生態系を分かったうえで作者の思いを込める。
・いい庭は最初からいい庭。年数がたつと落ち着いてくるが、よくないものはよくないまま。
・任されるということは、期待されている以上の結果を返さないといけないから責任は重い。
・言い切ると責任が生じるが、その重さに耐えること。
・腹をくくってプロ意識をもって仕事にあたる。

◆次回の予定【原則第３水曜日】
・10/19（水）　20:00 ～ 22:00 まで　姫路建設会館

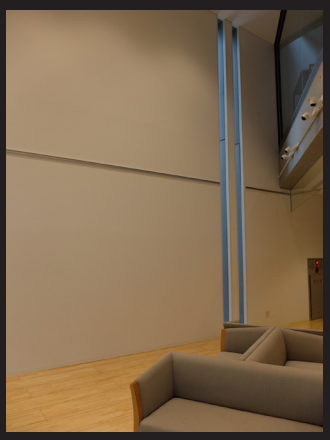
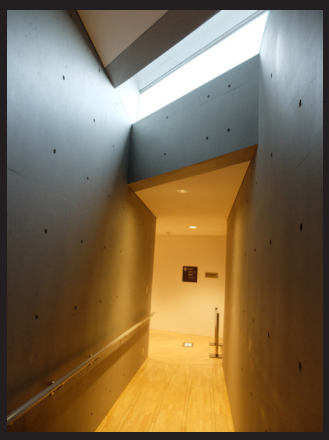
名　称：姫路文学館
所在地：姫路市山野井町 84 番地
建築年：1991 年 4 月（北館）　1996 年 5 月（南館）
設　計：安藤忠雄建築研究所







市制百周年事業の一環として国宝姫路城の北西の男山の麓に、播磨にゆかりの作家や学者たちを顕彰し文学活動の拠点となることを目的として建てられた資料館。
展示が行われている北館・南館と、大正時代に建てられた日本家屋の３棟からなる。

姫路城の建つ姫山と対峙する男山に建てられ、城を回遊するように様々なところから城を眺められるように演出されています。

ジグザグに設けられたアプローチから姫路城が眺めることが出来る。

北館と対比するように南館には大きくカーテンウォールが設けられ、水盤に浮かんでいるようです。

内部にも回廊が設けられ迷路のような空間。
様々なところから自然光が取り入れられる工夫がみられます。

2015 年 6 月から改修工事が行われ、2016 年 7 月 30 日にリニューアルオープンされました。
改修工事では外観は維持し、設備の更新、内装・展示のリニューアルがされました。
展示では映像を多く用いられたものが新設されていました。
今回の改修で外壁のコンクリート打ち放し面に塗装がされてしまったようで打ち放しの良さが薄れてしまったように感じました。

訪れた日はリニューアル記念とした無料開放期間中で多くの方が来館されていました。
以前学生時代に訪れた際は当日の申し出で内部撮影の許可が頂けたので今回も同じ様に許可をいただけると思い取材当日に申し出ましたが今回は北館内部の撮影許可がいただけず残念でした。

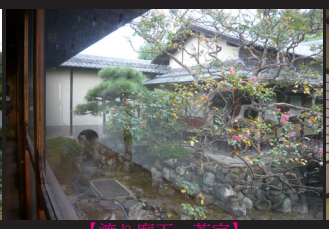
構造　鉄骨鉄筋コンクリート造（北館）
　　鉄筋コンクリート造（南館）
規模　地上 3 階、地下 1 階 / 床面積 3815 ㎡（北館）
　　地上 2 階、地下 1 階 / 床面積 2564 ㎡（南館）

開館時間 / 午前 10 時～午後 5 時
休館日 / 毎週月曜日と休日の翌日、年末年始

名　称：姫路文学館望景亭（旧濱本家住宅）　所在地　：兵庫県姫路市山野井町 86 ほか
（ひめじぶんがくかんぼうけいてい（きゅうはまもとけじゅうたく）

【概　要】
棟門（むなもん）：望景亭敷地の東端、文学館本館からの導入路に東面して建つ。間口 1.5m の腕木門、切妻造銅板葺で、控柱を建てる。一軒疎垂木。上部に菱格子を嵌める両開桟唐戸を吊り、女梁に絵様を施し、屋根は出の深い起り屋根とする。端正で洗練された意匠の門である。
茶室（ちゃしつ）：和室と池を挟んで建つ茶室。桁行 8.1m 梁間 6.9m、木造平屋建。切妻造桟瓦葺で、下屋をめぐらして外観を和室と調和させる。八畳の茶室と水屋からなり、庭側の開口を広くとる。トコ脇前を舟底天井とするなど凝ったつくりになる、開放的な茶室建築である。
廊下（ろうか）：和室と茶室を矩折れに繋ぐ廊下で、延長 9.6m の木造平屋建、招屋根桟瓦葺である。自然石を乱積風に見せる基礎上に建ち、外壁は土壁で腰モルタル洗い出し。廊下の南北にある庭を往来するための通路を跨ぐために足下をアーチ状につくる、特徴的な外観になる。
和室（わしつ）：敷地の西奥に位置する。桁行 14m 梁間 11m、木造平屋建、入母屋造桟瓦葺である。高い基礎上に建ち、内部は十八畳の座敷に十二畳の次の間を並べ、高欄付の縁をめぐらす。庭の眺望を意識した開放的なつくりで、欄間などの造作も洗練された、瀟洒な書院建築である。
姫路市文化財課ホームページより

【棟　門】


【渡り廊下・茶室】

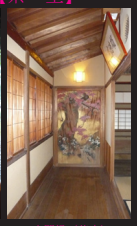
【茶　室】

【和　室】

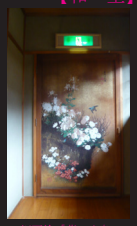
水屋（茶室）

縁側（和室）

土間縁（茶室）


土間縁（茶室）

渡り廊下


板戸絵「菊、小鳥」

「竹、流水」

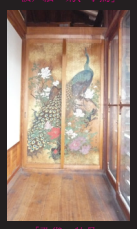
引手（茶室）

引手（和室）

板戸絵「牡丹、木蓮、柿」

板戸絵「さつき、山吹、滝」

「山桜、流水」


「孔雀、牡丹」

「鶏、白梅」

【感　想】
雨が降り出しそうな空模様とニラメッコしながら姫路市城内図書館から姫路神社の前を通るすごく大廻りな経路で姫路城の北側から小利木町～山ノ井町～姫路文学館と徒歩で移動。
ゆったりと時間の進んでいそうなお城北側から古い町並みをゆっくり一人街歩き。
途中、知らない小さな兄妹から拾った栗と松ぼっくりを自慢そうに見せられ　もう秋だなぁ…と郷愁に駆られるほっこりとした気分に水を差すように雨が降り出した。
予定していた時間より 30 分ほど早く着いたが雨に濡れたくないので、文化財の門を急いで潜り見事な唐破風が出迎えてくれる玄関庇の下へ、今回の見学先の『望景亭』の玄関引き違い戸を開けた。
大広間で待ち人を待つ！今回は現代建築『姫路文学館』とのコラボで見学人数は５人である。（参加者：藤本　正敏、関戸　佐智代、岡田　紗弥果）
この建築物は、和室、茶室、廊下、棟門、石垣が文化財指定となっている。
5 人揃ったところでとりあえず、大広間前の廊下を通り茶室と和室を目指す。
と、目に飛び込む気になるものが！　　笹の絵の描かれた板戸である。
後でじっくりと見よう！と奥へと進みまず茶室から。
茶室はいつ見学してもなぜか気が引きしまる感じで少し緊張気味の雰囲気の中襖の引手に目がいった。襖の引手、茶室内側が櫂形、外側が立鶴となっている。床の天井は網代が組んであり脇床の前は船底天井である。
茶室は作った人の考えが非常に表れる空間でもあり、本人しか分からない工夫も色々あるはずで、こういう空間は何度も通ってその度に新しい発見をするのが礼儀なのかもしれないと思いつつ、和室へ。
文化財指定の薄暗い渡り廊下を歩きながら、「田舎の軒の深い民家と同じ様に空間が薄暗いから落ち着けるなぁ」　という郷愁が（笑）
渡り廊下を左へ曲がると開けっ放しの引違戸の板絵が現れる。閉めると　見事な絵が現れる。
板戸絵は見た限りでは裏表で合計８枚、笹、百合、牡丹、梅、桜、菊、紅葉、鮎、孔雀、尾長鶏等がモチーフとして描かれている。（勉強不足で花の名前など間違っているかも…）
こういう素晴らしい板戸絵を直接見る機会は中々ないだけにこの板戸の絵だけでも見に行く価値があると思う。
いよいよこの建物の主役といってもよい４０帖の和室に入る。と、ここで少し違和感？
「ん？白い？」と感じた違和感は襖にあった。何人もまず、襖の引手に目が行くと思う。
少し大振りの獅子の描かれた白い　陶器の引手　存在感大である。この白い引手、そしてこの襖の縁が生地仕上であった為に全体的に白く感じた様だ。
この和室、照明器具なども凝っていて、奇抜なデザインながら、違和感なく人を招く空間の和室としてマッチしている様に感じたのは私だけ？
広縁に出て和室側の欄間を見ると、デザインされた格子は黒い漆仕上げである。
室内は白、室外は黒。一本取られた感じで心地よい驚きを受けた。
この広縁からは、茶室や渡り廊下、そしてこの施設のもう一つの見どころの庭園が堪能できる。
着物を着てお茶会などに参加できたら日本人として最高だろうなぁ　と脳内妄想をしながら建物を後にした。

追記：今回の見学は初めて雨の中で行われた為に、他の資料で見た和室の広縁の東部分を見学し忘れたのが心残りである…
　　この建物は安藤忠雄氏設計の「姫路文学館」の隣にある。世界的な建築家の作品と古建築を一度に体感できる数少ない貴重な場所です。

トピックス　第９回　変遷していくかたちと受け継がれていく文化　　三木　健義

西嶋支部長と支部総会の懇親会の席上で少しお話をさせていただいたときに、支部便りの原稿を依頼されました。どのような内容の話をしたか分からずに、思い出しながら文章を書いています。

最近記憶に残るような自然災害が日本列島において頻発しています。今年の４月に起きた熊本地震は記憶に新しいですが、それ以外にも昨年９月の関東・東北豪雨災害、一昨年の広島での土砂崩れや御嶽山の噴火、５年前には東日本大震災や、奈良・和歌山での豪雨災害など、大地震と噴火、そして大雨による被害が毎年どこかで観測されるような状況になっています。

2012 年９月　南三陸町　建物崩壊後

2015 年 10 月　奈良県　十津川村谷瀬の
吊橋付近崩落復旧工事カ所

2012 年 11 月　台南　烏山頭ダム　八田與一像

その中で、私自身は兵庫県土木施工管理技士会の会員として、東日本大震災の被災地の見学や、奈良・和歌山豪雨災害の現場を見学してきました。建築物に関しては耐震基準が強化され、かなり強靭になってきたり、昨今では夏かなり暑くなるため、空調効率を上げるため機密性をあげた建物が増えてきたりしている中で、その根本である地盤が崩れたり、津波で建物毎さらわれたりしたら、どうにもならないという無力さを改めて感じさせられました。東日本大震災の被災地の見学では、杭から根こそぎ引きはがされて横倒しになった鉄筋コンクリート造の建物を見たり、奈良県の谷瀬の吊り橋の近くでは、川を挟んで対岸の山が崩落してその反動で跳ね返ってきた土砂に集落ごと飲み込まれた現場を見学したりしました。

地盤や耐震強度はもとより、これからの建物を建てるにあたっては、雨の降り方の変化に対する備えなど気象条件の変化を考慮していく必要が生じてくるのではないかと思います。

同じく土木施工管理技士会で国土交通省の元技監との対話をする中で、文化に対する認識を新たにしました。それは、姫路藩士の子供である古市公威の話を聞いたことによります。古市公威は、姫路藩江戸屋敷で生まれ、幼少期姫路の好古堂で、国学と漢学を学び、フランス留学をして、初代土木学会長になった人だそうです。それ以外にも兵庫県は神戸が重要な港であったことなどから、あちらこちらに古い時代の遺跡があります。

また同会関係者で台湾に八田與一の作った烏山東ダムを見学にいったときは、與一の構造物を作ることだけではなく、その使いかたまで言及して習熟してもらったという話を聞き、それが現在でも脈々と生き続けているという話を聞きました。

話は変わりますが、私の所属している（一社）兵庫県建設業協会が関与して出版した書籍に『兵庫を築く』というものがあります。姫路支部の本棚にも保管してありますが、兵庫県全域の土木、建築構造物、その中に姫路近辺のものも掲載されています。

現在まで在り続けている建造物、日本のこの地に行き続ける文化としての建築と、環境の変化に伴って変えていかなければいけないところを融合させていき後世へ伝えていくことの重要さを改めて感じさせられました。

三木　健義
株式会社　三木組
姫路支部会員　元理事